【共同研究報告】

阪神大震災における「友人の死の経験」の語りと語り直し

やまだようこ・田垣正晋・保坂裕子・近藤和美

人は生きていく過程で、さまざまな喪失に出会う。本研究であつかう震災体験や死別体験は、喪失体験のなかでも、もっとも顕著で代表的なものであろう。

ただし、喪失は特殊な異常体験や、乗り越えるべき悲惨な体験とのみ見なしてはならない。喪失は、誰にとっても普遍的な体験である。たとえば子どもが大人になる過程は、一面では有能さの獲得であるが、もう一面では子ども時代というかけがえのない時の喪失としてとらえられる。従来の発達心理学は、獲得プロセスにのみ注目してきたが、喪失プロセスをも視野に入れる必要がある。

また、喪失を、単に「獲得」の反対語として、あるいは収支上のマイナスやネガティヴな意味でのみとらえてはならない。英語では、喪失（loss)は、「死」をも意味し、損失、欠損、損害、失敗、破滅、低下など価値的にマイナスの意味が付与されてきた。心理学研究においても、喪失は病理現象とのみ関連づけられてきた。喪失とは損失であり、「回復」「治癒」によって平常レベルに戻すか、「受容」するかが課題とされてきた。

しかし、日本語では、「無」「不在」「ない」には、ポジテヴィヴな価値も含まれ、それを積極的に認める文化がある。喪失に出会うことによって、私たちはより鮮明に、「生命」「存在」「愛」を反照的に自覚するのが常である。生涯発達という長い時間軸を考えるならば、なおさら、喪失をどれだけ意義あるものと認識するかによって人生が変わってくる。日常生活で私たちは、成功よりも失敗、獲得よりも喪失から、人生の生き方を学んでいる。ふつうの人々が、身近な人の死からどのように立ち直り、その死から何を学んでいくか、人間の健康な心理的発達のなかで、喪失体験を正当に位置づけていく必要があるだろう。

また、喪失を長期の時間軸でみていく必要がある。心的悲哀の回復だけならば、正常な生活に復帰した時点で終わりである。しかし、「死」の経験を生涯発達的にみるならば、その後の長期にわたる変化プロセス、内面化や意味づけや自己の人生物語への組み込みと、再構成プロセスこそ重要である。

私たちは日常、「時間が癒してくれる」「時間をおく」「ねかせておく」という言葉を使っている。ここで「時間」といわれている中身は何だろうか。ただ単に物理的時間が過ぎていけばよいということではないだろう。時間をおくことによって、心理的に何が起こるのだろうか。そこで注目したいのは、ハイデッガー（1927）が提出した「時熟する」という概念である。彼は、現存在の意味を時間性のなかで考えれば、自己は事物のように「存在」するものではなく、「みずか

らを時熟する」ものだと考えた。また森有正（1978）は、「体験」と「経験」を区別して、後者の意味を時間との関係のなかで次のように述べている。「その時すべての映像は時の堆積を重く帯び、本当に人を養うことができるようになる。そしてこの堆積が限りなく発酵を重ね、その内側から、時の流れに抵抗する重味が生じてくる時、それは結晶して、時を超える形を獲ようとする。」

人生においては、出来事の体験が、時間のなかで熟し、人を養っていく経験となり、それ自体が生きる力を与えてくれる。このような時間のなかでの変化プロセス、時間をへて自分のなかで出来事を再構成し、意味づけていく心理的プロセスこそ、人生の物語（life story）研究の核心であろう（Bruner, J.S. 1987, Mann,S.J. 1992, やまだ 2000など）。

以上のように喪失は、長い時間のなかで行われる人生の物語の変容・再構成プロセスの一環として重要な意味をもつ。喪失体験を語ること、それは、時の流れによる風化に抵抗して、かたちを失っても、見えなくなっても、「話すこと」「物語る」ことで、自分にとって大切な体験を他者に伝えていこうとする行為でもある。

以上のような問題意識から、本研究は、「死」を単なるネガティブな体験としてだけではなく、「生涯発達における喪失の意義」という観点からとらえ、人が喪失体験を自己の人生にどのように組み込み、意味づけていくかを、「語り」をもとに調べる一連のライフストーリー研究の一環として計画された。

やまだ（1999）では、「生涯発達における喪失の意義」「二人称的関係性のなかでの友人の死」「経験を人生物語へ組み込む変化プロセスの重視」「方法論としての語りと事例の重視」という観点から喪失と生成のライフストーリーの分析を行った。

やまだ他（1999）では、上記の観点に加えて「長期の時間軸の設定」を重視して、青年期後期の人々が震災における友人の「死」をどのように経験したのか、そのダイナミックな変化プロセスを、次の3点から調べた。（1）「死」の前の死者との関係性（出会い、親密さ、心理的な距離、死の前に何を共有していたかなど）。（2）「死」を知ったときの状況と短期的変化（死の直前・直後の行動、通夜・葬儀、その後1，2か月の心情や行動など）（3）自分のなかに起こった「死」の受容と死者との関係性の長期変化プロセス（「死」後から時間をへるにつれて、どのような納得のしくみが生じ、どのような変化が生じたか。人生観や死生観の変容、現在の死者との関係のありかたなど）。

本研究では、やまだ他（1999）の続報として、前回の1年後、震災から4年半後に語られた「友人の喪失」を、長期的な時間軸からみた「語り」と「語り直し」（re-telling）による物語の再構成と意味づけの変化に焦点をあてて報告する。

従来、「語り直し」の問題は、過去の記憶の間違いや不確かさや信頼性の指標として、あるいは同じテーマを異なるストーリーで物語る「ヴァージョンのある話」として分類される話型（小林 1995）として、あるいは情報的には繰り返し話す必要はないが、参加者の協同体験を促し、

所属感や連帯感を強める役割をするもの（Norrick,N.R. 1997）として、付加的にとらえられる傾向があった。しかし、本研究では、物語は本来的に完結したものではなく、過去も固定されたものではなく、人は生きていくプロセスにおいて、たえず物語を修正・生成・変化しつづけると考える生成学（la génétique）の立場に立つ。したがって、時間をへることによって語り直され、新たな意味が生成されていくプロセスを解明することは、発達と語り研究の中心的テーマだとみなされる（やまだ　2000）。

方　法

〔語り手〕震災によって友人を亡くした当時に大学生であった20歳代後半の青年３人（いずれも仮名）。やまだ他（1999）と同人物。聞き手は、前回と変更した。第１インタヴューは、1998年7-8月（震災後、約３年半）。今回の第２インタヴューはその１年後、1999年7-8月（震災後、約４年半）に、一人につき各約２時間、半構造化面接と自由な語りを組み合わせて行った。

（１）木田さん（男）。亡くなった友人は川野さん（女）で、友人グループの一人であった。震災時（1995. 1.17）大学４回生・神戸市在住。

第１インタヴュー時、大学院生（26歳）、神戸市在住。

第２インタヴュー時、大学教員（27歳）、京都市在住。

（２）林田さん（男）。亡くなった友人は浜野さん（男）で、クラスとクラブの親友であった。震災時大学４回生、奈良県在住。

第１インタヴュー時、会社員（26歳）、千葉県在住

第２インタヴュー時、会社員（27歳）、千葉県在住

（３）森田さん（女）。亡くなった友人は海野さん（男）で、クラブのあこがれの先輩であった。震災時大学２回生、大阪府在住。

第１インタヴュー時、大学院生（25歳）、神戸市在住。

第２インタヴュー時、大学院生（26歳）、神戸市在住。

面接には、フェイスシートとインタヴュー用紙を使用した（項目の詳細は下記参照）。また、インタヴューの内容は、語り手の許可を得てテープレコーダーで録音した。

［フェイスシートの内容］…語り手の年齢、性別、身分・職業、最終学校、現況、出身地（主に育ったところ）、現在の居住地、現在の家族形態。

［インタヴューの観点］前回のインタヴュー結果は語り手にフィードバックされ、好意的な感想を得ており、研究者と語り手との関係は良好な参画的関係にある。ただし、予見や誘導を防ぐために、今回の研究目的そのものは面接前には伝えなかった。実際のインタヴューでは、自発性を尊重し、会話の自然の流れで自由に語ってもらったが、以下のことは必ず聞いた。（１）震災当時の状況と亡くなった友人とのつきあい方。（２）震災から４年半は、自分にとってどのような

月日だったか。(3) 現在、震災のことを思い出すか。(4) 友人の不在を意識するのは、どういうときか。(5) 友人の家族とのつきあい方や墓参り。(6) この1年の自分自身の変化や身近で起きた変化。(7) インタヴューの方法や研究に対する率直な感想。

結果と考察

録音した会話プロトコルを逐語記述し、詳細に分析した。特に各個人別に、1回目と2回目のインタヴューにおいて、語りの内容が変化した点と変化しなかった点を比較した。

I　1回目と2回目の語りの比較　－何が変化したか

1　木田さん　－居場所の変化と物語の再構成

－亡くなった子の魂は、神戸にまだおるんかなとか思ってたんですけど、こんだけ時間たったら、もう、滋賀の方に帰ってるかと。ぼくも、それやったら、もう神戸抜けてもええんかいなって－

第2インタヴューの概要を第1インタヴューと比較し、変化した点について、変化しなかった点と対比してまとめた。その結果を表1に示す。

木田さんは、震災が起こった当時、大学の4回生であった。亡くなった友人の川野さんは、同じ学部で、仲のよかったグループのうちの一人であった。4，5人でいつも一緒に食事をしたり、遊びに出かけたりしていた。川野さんが亡くなった後、川野さんの卒論論文を代わりに書きあげる「記念の作業」を友人たちと行い、聞き手3人のうちでは友人の死をいちばん早く「乗り越え」て、卒業後は他都市の大学院に進学した。その後1年のあいだに、別の都市の大学に就職して、神戸市から京都市に引越した。

今回の変化として特記すべきことは、木田さんの物語に大きな再構成がみられたことである。とりわけ、「場所」についての語りが特徴的であった。それは、「引越し」によって震災の地「神戸」を離れるというライフイベントとかかわっていた。引越しによって、「神戸」と「震災」に対する見方にも、「死者」に対する見方にも変化がみられた。

まず前者に関して考えてみよう。木田さんは、他都市の大学院に入学しても、神戸を動かなかった。第1インタヴューでも、木田さんは、「神戸」という場所へのこだわりを次のように言及していた。「(他都市) の大学院に来ていますけど、まだ神戸からはなれられへん、っていうのも何かあるような気がする。」引っ越したほうが便利だが、神戸に住み続ける理由として、次のようにも語っていた。「みんな、神戸を出ていってしまって、院の友だちも出ていってしまって、お

るのは僕だけになっているんですよ…だから、出られへんような感じ。」「神戸に亡くなった子の知り合いがだれもいなくなるんですよね、僕だけになるっていうのがあって。（1回目）」

第2インタヴューでは、引っ越した後の神戸の見方が「外側から見る」ように変わった。「自分の生活の場というよりは、まあ、遠い、なんというか、震災のあった街の変わった姿やなっていうふうに、けつこう距離をとれて見れるようになったんではないかなと、思いますね。（2回目）」

興味深いのは、「場所」の経験が「時間」経験と連動していたことである。震災当初に比べると、物理的な時間は変化し、自分自身のライフイベントも、（大学の卒業、大学院への進学、他大学院への進学など）急速に変化した。一方では、「ゆっくり震災のことを、まあ、考える時間がなかったなあと思うんですね。もっと考えるべきやったんかな、とか思いますね」と語られているように、震災のことを考える暇もないほど忙しく時間の流れは速かった。しかし、その反面、神戸にいたあいだは、時間が止まっており、「時間を感じていない」「時間がたったという実感がない」状態でもあった。「そうですね、取り残されたっていうことかもしれませんね。というのは、…もしかしたら、自分がそういう、まだ、なんていうかな、時間を感じてないから。ずっと神戸におるんかな、とか思いながら。ま、引っ越しするのがじゃまくさかったっていうのも大きいんですけど。ま、でもやっぱり、神戸におりたかったっていうのもありましたから、うん。」**「復興とかしていって、ばーっと早く時間がたっている、周りは。でも、僕はまだずっと固着しているっていう、神戸に、ずっとおるっていう感じですね。」**

上記のような語りから、周りの時間はどんどん流れているにもかかわらず、自分はまだ神戸にいて当時の時間の流れを生きているような感覚もあり、どんどん流れる時間と、ある意味で止まっている時間という二重の時間のあいだを生きていたことがわかる。

彼は神戸を出たことは良かったと、次のように語っている。**「それはやっぱり距離をとれたっていうことですね。そんで、区切りがつけたということ。区切りって自分でようつけへんかったんですよ。」**「ま、そういう意味で強制的な外からの力っていうのを、なんていうか、それに頼ったかもしれませんけど、ま、それによって、ふっきり、ふっきれる、ま、きっかけになったと、いうことで。そうですね、すごい良かったとは思ってます。」「やっぱり抜け出ないかんわけで、そのきっかけがやっぱり必要やったんかな、と、思いますね。」

特に興味深かったのは、引っ越しによって自分の居場所が変わり、「神戸」に対する見方が変わっただけではなく、「死者」の居場所も「神戸」から移動させており、物語が大きく再構成されたことである。

木田さんは、第1インタヴューで、震災後何ヶ月か後に一度だけ見た川野さんが出てくる夢について言及していた。その夢のなかでは二人は同じ神戸大行きのバスに乗っており、川野さんが座っている半分があの世で、木田さんが座っているもう半分はこの世であった。二つに分かれているとはいえ、同じバスに乗っており、「同じ場所」にいたことが、木田さんにとって大きな意

味を持っていた。

第2インタヴューでは、自らの移動に伴って死者の居場所も移動させた。例えば、前回は、「みんな神戸を出て行って」しまって、神戸にいるのは自分だけになってしまった。「だから、出られへんような感じ」と述べていたのに対して、今回のインタヴューでは、みんなが神戸から離れてしまった今では、川野さんはもうここにはいないのではないかと語られている。また、第1インタヴューでも、川野さんが住んでいたところには建物(前回はまだプレハブであった)が建っていたが、今回の語りではその点が特に強調されており、他の家が建ってしまったから、そこにはもう川野さんはいないと語られた。そして、誰も知り合いがいなくなったのだから、川野さんの魂はふるさとの滋賀県、実家に帰ったのではないかと語っている。だから、自分も神戸を離れてもいいのではないかという説明がなされた。

「亡くなった子の、魂は、例えばどこにおるんかなってずっと考えてたら、ま、神戸にまだおるんかなとか思ってたんですけど、やっぱり、もう、こんだけ時間たったら、もう、滋賀の方に帰ってるかと。うん、思って。もうぼくも、それやったら、もう神戸抜けてもええんかいなっていう、そういうのもありましたね。」

このように、自分は神戸からは離れたが、京都に移動したことは、死者の魂の居場所が滋賀であるならば、そこへ近づいているのだという、新たな意味づけの語りがなされた。自身が京都に移動したことの意味を、川野さんの魂を滋賀に帰すことによって、一方では神戸から遠ざかりながら、もう一方では滋賀に近づいているという二重の意味づけによって、物語が再構成されていたといえよう。このように、一つの出来事にいくつかの意味を持たせることは、私たちが生きていく上でよくなされる。

以上のように木田さんは、神戸を離れ京都へ移ったことにより、大きな「語り直し」を行ったことがわかる。神戸を離れてしまうと、「自分だけは神戸に残っている」という、これまでの物語はつじつまが合わなくなる。したがって、ナラティヴのひとつの特徴である、語りにおける整合性、一貫性を持たせるために、新たな語りが生み出されたのであろう。引越しは、このような語り直しの契機になることが多い。私たちはライフイベントに伴って物語を書き換えながら、自分の人生に新たな意味を生みだしていると考えられる。

2　林田さん　－亡き友人の存在意義の強調、友人の勉強法の一般化

－あなたの息子さんは、この世の中に何かを残していった。それは私です。息子さんのおかげで就職もできました。－

林田さんは奈良の自宅から神戸の大学に通っていた。神戸に下宿していた浜野さんとは、クラブも学部も同じであり親友だった。自身も震災前日、浜野さんの下宿に泊まりに行くことになっ

ていたが、病気でとり止めたため、被災せずにすんだ。2回生のときに震災に遭い、震災直後の家の倒壊で浜野さんを亡くした。林田さんは震災から卒業までの2年間もクラブを続けた。卒業後しばらくは奈良から大阪まで通勤していたが、東京に転勤になり、現在は千葉県に住んでいる。前回のインタヴューから今回までの間に林田さんに生じた出来事は、新しくプログラミングの仕事を始めたことであった。

表2に、第1インタヴューと比較して、変化した点と変化しなかった点をまとめた。変化した第1点は、友人が存在していたことは「忘れない」と存在意義がより強調され、対照的に震災体験は「忘れるかもしれない」と距離がおかれるようになったことである。そして第2点は、60点の勉強法が仕事にも応用され一般化されるようになったことである。

第1点に関しては、被災体験は忘れるかもしれないが、浜野さんが存在していたことは忘れないという気持が強くなった。前回のインタヴューでは林田さん自身は「被災者ではない」といいながらも、「引きずられるとねえ、駄目だからねえ、...昔のことと思わなかったら、まあ無理だよ、大ショックだったからねえ、神戸の人たちもそう思っているんじゃないの、...忘れちゃいけないことは、あるんだけれど、忘れて、がんばんないと、もう、やっていけないよ」と語っていた。

今回は、「その場に生きていないと難しい、震災を覚えているのは難しいかもしれない」「**震災ということは忘れるかもしれないけれど、浜野のことは忘れない。**」「**震災ということは忘れかけてるけど、浜野のことは忘れていない。**旅行みたいな感じで墓参りに行く。同期のやつで行っているのは俺だけらしい」と語られた。林田さんは奈良の自宅から神戸の大学に通っていたため、もともと自身は被災体験者ではなかった。木田さんが、震災地「神戸」にこだわりをもっていたのとは対照的に、彼は神戸という場所よりも、「親友の死」のほうに大きな意味づけを与えていた。

林田さんは、「友人を忘れない」ことや、友人が生きていたことの意義を以前にもまして強調するようになり、それについての語りが繰り返しみられた。

「**(他の友人は) 話すのいやがる。死者のこと話すとよくないらしい。...俺は話したほうがいいんじゃないかと思ったけど、(他の友人は) 意識的に避けた。...(俺は) そいつ (浜野) が生きていたことを否定したくないから。忘れるということは否定することじゃねぇか。いじめで嫌なのは、無視されること。忘れたふりをされること。これはよくない。**」

林田さんは、浜野さんの家族に対しても、存在を忘れないことをいちばん強調していた。「俺にとって震災は浜野がいなくなったことだから。親御さんに浜野を覚えているやつがいる、ということを言ってやることが大事かな。」親御さんに向かってということを想定して語られた次の言葉は、彼自身のなかで浜野さんを4年半後の今でも大切な存在として意味づけていることを示す語り、しかも「感謝」にみちた、非常に印象的な語りである。

「**あなたの息子さんは、この世の中に何かを残していった。それは私です。息子さんのおかげ**

で就職もできました。」

林田さんは、仕事が忙しいにもかかわらず、この研究に対しても好意的で、前回の研究をまとめた報告書を高く評価した。前回は、「今、話したもので、どんなもの書くんやろということを不思議に思うんだけどね、書けんのかなって、僕は思うのよ、... ただ雑談みたいなこと話してて、研究材料になるんかなと思って、不思議に思うんだけどさあ、...大丈夫？（1回目）」と言っていた。前回の論文を読んだ後の今回の語りは、次のように変わった。「これはダントツだった。...これは俺がしゃべっている口調で書いているからすごい。...身近に感じる。うまいな、と思った。他の人のを見ていると、人それぞれ違うんだな、と思った。死んだ人に対する想いと行動が違うということがわかった。...こんだけやってくれたら、協力しようかなという気になる。（2回目）」

そして、彼が研究に協力するのも、浜野さんの存在が何かのかたちで残ることに意味があるという想いが根底を貫いているためである。次の言葉には、友人の死を個人の体験、プライベートな体験として終わらせないで、意味のあるかたちで公共（public）に生かして役立てたいという想いと、自分よりも友人である「浜野さん」を残したいという想いが、語られている。

「浜野が、研究してくれることによって、存在が残るわけ。浜野が残るわけ。俺が個人として評価しているわけじゃなくて、研究としてくれたことだから、浜野が研究材料になることによって、残してくれたものがあるのじゃないか。言い方、ちょっとうまく言えないけど、そういうのがあるから僕、うれしいね。ここまでやってくれるとうれしいよ。」「感動したから、すごいと思ったから。こういうのやってくれるとすごくうれしいから。**浜野が研究材料になることによって、生きていたという証拠になるから。阪神大震災で5000（ママ）人死んだけど、そのなかで研究の対象として役立ったと思う。私はそういうことをやってくれるとうれしい。」**

変化した第2点目は、前回語られた浜野さんから教わった「60点の勉強法」の一般化である。前回のインタヴューで林田さんは、システム開発に従事していたが、「60点の勉強法」は学生時代の回想のみに関連づけられ、現在のシステム開発とは関係づけられていなかった。ところが今回林田さんは、「天才の勉強法」としてシステム開発への有用性へと拡張された。コンピューターの経験が「ゼロ以下」だったにもかかわらず、この「天才の勉強法」によって、仕事ができるようになった。**「すごいよ。だから感謝する、って言ってんだよ（笑い）。天才の思考方法をまねするとすごいね。**けど、すごいやつにはかなわないけど、最低限はわかってる。」このように、学生時代に役立っただけではなく、現在の仕事にも応用されるようになり、浜野さんの勉強法が一般化されている。

前回は、浜野さんに教わった勉強法が、「過去」を思い出す回顧的（retrospective）方向に向かっていた。しかし、今回は現在の仕事に役立つツールとして、現在の文脈のなかに転移（transfer）し、展望的（prospective）に用いられるようになったといえよう。この時間方向の変化は大きい。これからも林田さんが今後の人生において重要なことを学ぶ際のツールとして、

拡張されていくと思われる。

林田さんは、先に述べたように「友人の死」の重さに比べると、「被災者」としての自己の位置づけは非常にうすい。しかし、それも聞き手しだいである。関東の人が聞き手として想定されたときには、前回と変わらず依然として「被災体験者」の側に自己を位置づけていた。それはたとえば、次のような語りにみられる。

「東京の人わかんないかもしれませんけれど、ビル壊れた場合どうするんですか。システム全部パニックですよ。」「ここに阪神大震災来たら、ビルごとつぶれるわけですから、どうしようもないですよ」と分散システムの良さを主張するとき、「関学にいました、と言ったらわかるからさあ、(相手も) 黙るわけね。経験が違うから。...そうすると偉いさんもわかるわけ。分散にしたほうがいいなって。」

このように林田さんは、東京にいる非関西人に対しては神戸の大学にいた「被災者」、関西人に対しては奈良に住んでいた「非被災者」の位置で語った。聞き手が誰かによって、自己の位置どり (positioning) が変わり、物語の内容も変わることは、語りが話し手と聞き手との共同行為であり、共同生成によってなされることをよく表していると考えられる。

3　森田さん　－がんばる自分を彼が喜んでくれる

－自分ががんばることで、彼が喜んでくれるだろうと、考える。それがふつうになってきている－

森田さんは、震災当時、大学の2回生であり、クラブのあこがれの先輩であった海野さんを亡くした。彼女は、今回も海野さんのことを、次のように語っている。

「誘われたんですよ。クラブに彼から。その時のすごい気さくな感じと、やるときはやるって感じとか、...すごい尊敬していたし。一緒にいたときの場のなごませ方とか、アルバイトとか、きゅうきゅうの生活の中で、すごいやってはって。..」「私も今でもなんか (笑い)、がんばらなきゃとかしますよね。とりあえず、あの笑顔がすごいなー。すごいー。」「ほんとにすごいパワフルな人だったんですよ。(2回目)」

森田さんは、前回と住居も大学も変わらず、同じ環境下に暮らしており、他の2人と比べると、ライフイベントにおいても、語りの内容においても、もっとも変化が少なかった。森田さんの第1インタヴューと第2インタヴューの語りの変化は、表3にまとめた。

「(不在をもっとも強く感じたのは、) 震災後、クラブをやっていたときですね。強烈でした。ほんとうにいるはずなんですよ。ほんとにいるはずなのに、いない、という感覚が。いろいろポジティヴには考えていたけれど、やっぱり、いない、という感覚からは逃れられない。いるはず。今でもそう思ってるね。そういう意味では、まだ、信じれていないのかなー。いるはずなのになー。

(2回目)」

「クラブであああいうシーンていうのは、私たち卒業して2年半たってるんですけど、変わらないんですねあんまり。たとえば、...練習風景とか変わらないんですね、ただメンバーが変わっているだけで。だから、すごい想像ができるんですよ。彼がいたときの。ああいう風にしていたなーて、すごい思い浮かべたこともあるし。(2回目)」

このような不在の語りは、第1インタヴューと同様だが、「思い出す間隔」が変わった。

「やっぱり思い出すとかそういういうことを感じる間隔というのが以前と比べたらかなり広くなってきているというか、時間的に。そんなにしょっちゅうしゅっちゅう思い浮かべるわけではなくって、ただその思い浮かべるポイントはありますよね。こういう時、こういう時っていう、この先もこういう間隔が広がっていくのかなって思うと、ちょっとこわい気もするけど、でもまあ、当然かなとも思うし。(2回目)」

「間隔がすごく空いてきてて自分がそういう感情になるってことが、果たして海野さんの死からのステップに基づくものなのか、その他の部分なのかそういう区別はつかないんですね。(2回目)」

森田さんは、前回は、海野さんの過去の行動を想いだし、それをモデルにして行動していた。今回は自分が行動したあとで、海野さんのことを思い出して「喜んでくれるだろう」と想うように変わった。

「彼ならこうしてたかなって、いうのを思い出すとか、何かそういうホントにちっちゃいちっちゃいことが何度も何度も考えさせられるきっかけになった。」「新しい1回生とかが入ってきて、その時に、あー海野さんなら、今こういうふうに言ってたんかな、...とか想うと、それを(私が)やらなきゃと想ったりとか、そういう本来海野さんがいたらやっていただろうな、てことがめちゃわかんねん。だから、それを私が...がんばらなきゃって。(1回目)」

「彼だったら、こうするだろうということで、そういうこと(暗い時間)から逃れようとするし、**自分ががんばることで、彼が喜んでくれるだろうと、考える。それがふつうになってきているっていうか。逆に、何かをやってしまったあとで、これはもしかしたら、海野さんがしていたことに近いかなと変わってくる。海野さんの死があって、だから、こういうふうになったんかなっていう。がんばっている私... 後で、海野さんを思い返す。**いつぐらいからっていうのは、ちょっとわからないね。(2回目)」

今回のインタヴューでは、海野さんが生前していたことをモデルに行動し、海野さんの生き方を自らの行動の指針や支えにするのみではなく、「何かをやった後」で、海野さんのことを思ったり、海野さんが喜んでくれると思うようになった。海野さんが行動の導き役だったところから、森田さん自身が自律した行動主体となり、海野さんが見守り励ます役目へと変化した様子がうかがえる。そしてそのような「がんばっている自分」を、海野さんはどこか身近で見ていてくれるのではないかと前回と同様に感じている。

森田さんのもうひとつの変化は、海野さんが亡くなってからは、クラブやバイトに没頭したりと、とても忙しい生活を送っていたが、次第に「焦らなくても」と考えるようになってきたことである。

「(新しいライフイベントなど) ないです。とても楽しくやってます。**妙にいろいろとそんなに焦らなくってもって思いながら、というようになった気がします。**それまで、余裕がないガーッという感じで生活をしてて。よく友達とかと話してて私もそうだなと思ったんですが、道があって、石があって、丁寧に一個一個の石を吟味しながら、自分の篭に入れていく人もあれば、たぶんガーッとけちらして、とりあえず前に向かって進んでいく人もいるし。私もすごい後者だったんですよ。何かがガーッと、どうですか。アハハ。(笑い) ...その辺がちょっと変わってきたかな、この1年くらい。(2回目)」

そのような変化とあいまって、海野さんを思い出す際の感情も変化してきた。例えば、これまでは震災に関係することや、お葬式など、また大学やクラブと、海野さんを思い出すことに触れると涙が出たが、今では友人などと海野さんについて話す内容も変わってきた。もともと「切り替えは結構早かった気がする」と語られていたが、第1インタヴューでは「身体症状にはすごく出ていた」し、身体の不調について語られることが多かったが、今回は身体の話はなかった。

また、今でも涙が出るが、それは「すっきりする涙」で、悲嘆の涙とはちがっている。

「今になって、辛かったときのことを思いだして泣くことはないんですけど、その笑顔とかを思い出して、むしょうに涙が出て来ることがあるんですよ (涙ぐんで)。ほんとにたまに。これは、ほんとにすっきりするっていう涙かな。あ〜、会いたいな〜。(2回目)」

「友達としゃべる内容も変わってきました。最初の頃は、こういうこともあって、こういうこともあってとか、なんでこういうことになっちゃんたんだろうかということを話したりとかして、わけもなく涙が出たりしたこともありましたけど。それが.. 去年、友達の結婚式があったんだけど、「海野さん、喜んでくれたよね。きっと。もしかしたら、今、ここにいはるかもね。いはるよ。きっと。」こういう、今、話できるし。基本的には暗い時間はそんなに長くなかったと思うんです。」

森田さんには、海野さんの家族との交流や、おなじような経験をした人、遺族や被災者の方々と「共感」しあえること、話あえることが大きな支えになった。今回のインタヴューでも、つれあいを亡くされた人と話をし、ともに涙を流したりしたことが、「がんばらなきゃと思って心の支えになった」と語っている。このように、森田さんにとっては他者と亡くなった人の話をすることが、木田さんや林田さんよりも、重要な意味をもっていた。だからこそ、上記のように、「他の人と思い出話ができるようになったこと」が、「海野さんの存在に対する視点や感情の変化」と共に語られたのであろう。

したがって、引っ越しによって神戸から離れたことがプラスと位置づけられた木田さんや林田さんと違い、森田さんは、震災の話を共感しあえる人がいる「神戸」にいつづけることは、プラス

として意味づけられている。神戸から離れている人は、たとえば、下宿していた子どもさんを亡くされた人は、怒りをぶつける場がないうえに、話して共感しあえることもない、ということに対して、「しんどいだろうな」、「実際おなじような立場で、おなじ被害を受けた人が、話をできるというのはすごく大きいことだと思うね」と前回のインタヴュー時にも述べていた。

「場所」は両義的である。悲嘆からの立ち直りについても、その場所を離れて新しいところに移ったほうがよいか、なじみの同じ場所にいたほうがよいか、外側の条件だけで考えることはできない。しかも、場所の選択は、住居も学校も職場も自分の意志だけでは決められないことが多い。したがって、その場所を、どのように自己の物語のなかに意味づけていくかが重要であろう。森田さんの第1インタヴューと第2インタヴューでは、森田さんの人生における海野さんの位置づけが変化した。これには、さまざまな人との交流、思い出を語り合える人々がいるということが大きいと彼女は考えている。

「この駅付近では、ほんとによく遊んでいたから。...彼といろんなお店行ったりしてたんで、お店のマスターとかお店の人とか、そういう話が今でもできる。」「**しゃべれるっていうのは、大きいかもしれないですね。そういう意味で。思い出、思い出っていうか、当時のこととかを一緒に共有してしゃべるっていうようなことをできる。**で、そのときには、今みたいな、それによって自分がどう変わったとかは考えないけれども、忘れていたそのへんのトピックスとかが浮かびあがってきたりすると、(あんなことが)あったね〜とかって。(2回目)」

彼女は、フィードバックした前回の研究論文に対しても好意的であったが、「死者の存在意義」を強調した林田さんとは観点が異なり「自分の体験をことばにすることの難しさ」から「自分の体験を他者に語ることの意味」への変化として語った。

前回は、次のように語っていた。「こういう話をしているとやっぱり(彼が)この上でなんか見ているような気がして、海野さん、ごめんみたいな、うまくしゃべれんかったわ、ってそういう感じかな。でも、正直いって、ある程度のストレスにはなるよね。こういう話をするのは。いい意味にしろ、悪い意味にしろ、タバコの数も増えるし、みたいな、そういう感じはあるけど。」(ストレスっていうのは、話をすること自体にですか、それとも言語化できないことにですか。)「うん、どっちかいったら、...うまく言葉に出せないっていう。(1回目)」

今回は、次のように語られた。

「(前回の論文を読んで)あ〜、おもしろかったですね。話をしているときっていうのは、何か気のおもむくままに一生懸命しゃべっていて、後で何をしゃべったかというのは、あまり頭に残っていないもんですよね。...あの報告書とか見せていただいて...4, 5回読みましたね〜。その時とかの感情ってのは、やっぱりネガティヴなときも多いし、でも、その会話の流れを書いたのを見ると、あっ、確かにこう言ったなと思っているうちに、**この先の自分が楽しみみたいな。(海野さんのことは)決して良い体験ではなかったけれども、大きな体験。残された人の人生の支えになる。最初は、絶対にそんなにならないと思っていても、4年たって考えてみると、そう**

なっている。だから、やっぱり、この先は予想はつかないんですね。どうなるか。(2回目)」

「いつ死ぬかわかないけど、何があっても生きていける、この先、これからもある程度、自分にとってのイベントというか危機的なことがあったときには、海野さんのことを思い出すか、それまでのプロセスで得たものによって、乗り越えていけるような気はしますね。(2回目)」

II　総合考察　－3人の語りのまとめ

今回のインタヴューでは、3人の語りを第1インタヴューと語りと、第2インタヴューの語り直しの比較という観点から、できるだけ「生の語り口」を生かして詳しく分析した。

「生の語り口」を生かすのは、「数量化」よりも「質」の分析と、個々の事例「語り手」の内部における意味づけの変化の具体的分析を重視したからである。また、それだけではなく、現場(フィールド)心理学の方法論として、「生の現場」「生の語り」そのものから学ぶことが何よりも大切だと考えるからである。私たちは、既成の概念をトップ・ダウン式に現実のデータに適用するのではなく、ロー・データから学び、ボトム・アップで理論構成する「モデル構成的現場(フィールド)心理学」の方法論(やまだ　1986)を採用した。この方法論では、語りのデータそのものは徹底的に事実に基づいていなければならない。

この研究では、テープに録音した語りをプロトコルに起こした後、その語りを分析する前に、語りの文脈も含めて、全体として何が語られているのかを読みとるために、丁寧に何十回も精読した。言葉の一語に引きずられて、全体を読み誤ったり、自分のもっている思いこみで安易に解釈する危険を防ぐためである。また、複数の人間が何度もローデータまで戻って、読み誤りがないか、別の解釈の可能性がないか繰り返しチェックして討論し、何度も書き直した。

ローデータに謙虚に徹底してつきあうことは、語り研究では特に重要と思われる。語りの分析は、語りのデータを恣意的に都合のよい部分だけをつまみ食い的にピック・アップして、既成の概念や主観的な解釈をあてはめる方法とは、根本的に異なっている。人生の物語研究は、「物語」ということばで通常連想されるような、どのようにでも恣意的に構成できる研究とはほど遠く、ノン・フィクションという名のフィクションやルポルタージュとも一線を画すべきである。そして「事実は小説よりも奇なり」ということばを繰り返し思い起こさせるものでなければならない。生の現実、そこで起こっていることから学ぶという謙虚な姿勢で研究すること、それによってのみ、生成的発見があると考えられる。

語りを分析することは、自己の拡張ではなく、「語り手」と対話をかわすことであり、「他者」と出会うことである。「他者」の語りをありのままに尊重しながら、他者の語りを「自己」の文脈のなかに入れ、そのせめぎあいのなかから新たな解釈や意味づけが共同生成されていく、そのようなダイナミックな生成プロセスが、研究の過程においても、真に実行される必要がある。

3人の語り直しの特徴は、次のようにまとめられる。

3人とも一年前と同様のテーマで 同じ内容のことが語られたが、そこには新たな物語の再構成としての語り直しが行われていた。友人を失ったことによって、その友人が自らの人生についての語りのなかで占めていた場所が、物理的に空虚なものとなる。そのような「事実」に抗して、それぞれが自らの人生とのかかわりにおいて「意味」づけようと、さまざまな語りがつむぎだされていた。そしてその意味づけは、自らの人生と深くかかわりあいながら、人生の物語としての語りと共に変化していた。

また、3人ともそれぞれに、震災と友人の死に対する意味づけを行う際の語りの位置（position）が異なっていた。特に興味深かったのは、語り手と、語りのなかで想定された「他者」との関係である。林田さんは、語りのなかで「『親御さん』や『東京の人』への語り」を再現（represent）し、森田さんは、海野さんの死を「友人」と共有する「語り」として再現した。語りは、話し手と聞き手の共同生成であるだけではなく、話し手がイマジネーションにおいてどのような「他者」を想定するかによって、語りの位置が変わり、語りの内容も変化した。

今回、いちばん興味深い論点としてあらわれたのは、＜場所と時間＞の関係であった。この点に関して、3人の語りをまとめると、以下のようになる。

木田さんは、就職で「神戸」を離れるというライフ・イベントがあったこともあり、語りは「場所」を中心として大きく再構成された。震災地「神戸」は外側から見られるようになった。また、神戸にいたときは、周りの時間はどんどん流れているにもかかわらず、当時の時間の流れを生きている感覚もあり、どんどん流れる時間と、止まっている時間という二重の時間のあいだを生きていたが、その時間感覚も変化した。

また、特記すべきは、自らの移動に伴って死者の居場所も移動させたことである。前回は、みんな神戸を出て行って、神戸にいるのは自分だけになってしまった。だから、神戸を出られないと述べていたのに対して、今回は、みんなが神戸から離れてしまった今では、彼女はもう神戸にはいないのではないか、そして、誰も知り合いがいなくなったのだから、川野さんの魂は滋賀県のふるさと、実家に帰ったのではないかと語っている。だから、自分も神戸を離れてもいいのではないか、また、神戸から京都に移ったことは、むしろ彼女の魂の居場所である滋賀には、近づいていると意味づけられた。

自分自身の移動とともに、「神戸」という場所の意味が変わり、神戸（友人が亡くなった場所）からは離れるが、滋賀（友人の魂のふるさと）には近づくという、新たな物語の再構成がみられたわけである。

林田さんの場合にも、奈良から神戸に通学、奈良から大阪に通勤、東京勤務というように、他の2人よりも大きく場所を移動しているため、場所における死への意味づけの変化が顕著であった。林田さんは奈良から大阪へ通勤している期間について「海野さんは神戸にはいるが、奈良にはいない」として、卒業で神戸を離れたことが心理的な区切りとなったと語られた。林田さんの東京勤務は「神戸」ではなく「関西」から離れたという意味が強かったと思われる。そして東京

の人、つまり「非関西人」に対しては被災者、「関西人」に対しては震災時に神戸に（住んで）いなかった非被災者、さらにそれと区別される「浜野さんの死」を加えれば、林田さんは震災について3通りの意味づけをもち、状況に応じて語り分けていると考えられる。

ただし、震災に関して林田さんにとっては「神戸という場所」よりも「親友、浜野さんの死」のほうが圧倒的に大きな意味をもっっていた。そして「震災体験」が風化し、うすれていくのに対して、「親友、浜野さんの死」は逆に忘れないように、彼が生きた存在の意味を残そうとする語りが強化された。また、語りの内容は時間的には回顧方向から未来方向に、社会的には私的から公共の方向に変わった。浜野さんに教わった「60点の勉強法」が、学生時代の思い出のみではなくなり、現在の仕事に使われる一般化されたツールとなったのも、「友人の死」を忘れないで生かそうという意味づけの一環と考えることができよう。

森田さんは、前回と大学も居場所も同じで、神戸を離れておらず、大きなライフ・イベントもなかったので、3人のなかでは一番変化が少なかった。「神戸にいつづける」ことは、体験を共有でき、語り合える人がいるということであり、他の地に移った2人とは別の肯定的な意味づけがなされていた。

森田さんは、海野さんの死を今でも信じられないと思うことがある。それは、木田さんの場合とは意味が逆で、クラブなど、彼の「不在」を強く思い知らされる場面において語られた。木田さんが、卒業後に会っていない多くの友人の一人として、「どこかで生きているかも」とふっと思うのに対して、森田さんは、クラブなど彼がいた場面、いるはずの場面で、「彼がいない」と痛感するのである。

森田さんの変化は、「死んだ友人と自己の関係」と「自己の人生観の変化」において語られた。第1インタヴューでは、彼を思い出すたびに涙が出ることや身体症状についての語りがあったが、今回はなくなった。思い出話も、明るく友達や知人と語り合えるようになった。たまに涙がでる状況も変わり、辛いときではなく、うれしいとき、「すっきりする涙」になった。また、海野さんを思い出し、モデルにして行動していたのが、行動した後で海野さんのことを思い返し、海野さんがよろこんでくれるだろうと思うようになった。

人生観は、一方で「何があっても生きていける」と自信を深め、もう一方では「焦らなくてもいい」とゆとりをもてるようになった。

以上のように、3人の語りの主題の相違は、2回のインタヴューを縦断的に重ねあわせることで、より明確になった。木田さんは「神戸という場所」、林田さんは「親友を忘れないこと」、森田さんは「いない友人と現在の自分との関係」が大きなテーマであり、その主題をめぐって、繰り返し同じ内容が語られ、少しずつ異なる意味づけの語り直しがなされた。当人において、もっとも切実な主題、こだわりのある主題において、もっとも大きい意味づけの変化がみられたことは興味深い。

人生について語る際には、それぞれの現在の状況的文脈から大きく影響を受け、その文脈に応

じて、一貫性をもち、適切とされるような語りへと構成され、また再構成されていく。このように人生についての語りは、固定したものとしてあるのではなく、常に具体的現実とのかかわりにおいて、生成的に変化しながら、語り直されているのである。また、自らの構成した人生についての物語をもとに、さらにその後の人生が意味づけらていくのであろう。

謝辞

貴重な体験を語って下さった3人の語り手の方々に、心より厚くお礼を申し上げます。ひとつひとつの言葉を珠玉のようにいつくしみながら、多くのことを学ばせていただきました。

引用文献

Bruner, J.S. 1987 Life as narrative. Social research. 5, 11-32.

ハイデッガー 1927 (原佑也訳) 存在と時間 中央公論社

小林多寿子 1995 インタビューからライフヒストリーへ ー語られた「人生」と構成された「人生」 中野卓・桜井厚 (編) ライフヒストリーの社会学 43-70. 弘文堂

Mann,S.J. 1992 Telling a life story: Issues for research. Management education and development. 23, 271-280.

森有正 1978 森有正全集1 筑摩書房

Norrick, N.R. 1997 Twice-told tales: Collaborative narration of familiar stories. Lamguage in society. 26, 199-220.

やまだようこ 1986 モデル構成をめざす現場(フィールド)心理学の方法論 愛知淑徳短期大学紀要, 25, 31-51. (やまだようこ (編) 1997 現場(フィールド)心理学の発想 新曜社 161-186.)

やまだようこ 1999 喪失と生成のライフストーリー 発達79, 2-10. ミネルヴァ書房

やまだようこ 2000 人生を物語ることの意味 ーなぜライフストーリー研究か? 教育心理学年報 146-161.

やまだようこ・河原紀子・藤野友紀・小原佳代・田垣正晋・藤田志穂・堀川学 1999 人は身近な「死者」から何を学ぶか ー阪神大震災における「友人の死の経験」の語りより 教育方法の探求2 61-78. 京都大学大学院教育学研究科・教育方法学講座

(発達教育分野)

表1　木田さんの1回目と2回目の語りの比較

		変化した点					変化しなかった点
1回目	語りのまとめ	友達がみんな就職などで神戸を離れてしまったので、残ったのは自分だけになってしまった。そのために、他都市の大学院に進学したにもかかわらず、自分だけは離れられず、神戸に住み続けている。			夢の中で川野さんと同じ神戸のバスの中にいた。	川野さんの住んでいた場所が通学の際に見える。	大学を卒業したために会わないだけで、どこかで生きているのではないか。
2回目	語りのまとめ	神戸から引越した。	「神戸」がもつ意味が変化した。	自分も知り合いもみんな神戸を離れた。	川野さんの魂が滋賀に帰った。	川野さんを思い出すきっかけが変化した。	川野さんはどこかでまだ生きている。
	語られた経験	就職に伴い、震災後初めて神戸から出て、京都に引っ越した。	神戸がもはや生活の場ではなく、象徴的な場所になった。	川野さんの住んでいた所には家が建ってしまった。また、神戸に川野さんの知ってる人はもういない。	川野さんの魂はもう神戸にはない。滋賀に帰ってしまっている。	川野さんを思い出すきっかけとして滋賀という場所が大きな意味をもつようになった。	大学卒業後、会わなくなってしまったほかの友人と同様、会うことはないがどこかで生きていると思うことがある。
	語り口の具体例	「ずっと神戸におったわけですよね。やっぱり、今年から京都に来たっていうことで、また別の意味で震災のこと思い出すようになったというか。」 「それはやっぱり距離をとれたっていうことですね。そんで、区切りがつけたということ。区切りって自分でようつけへんかったんですよ。」 「ま、そういう意味で強制的な外からの力っていうのを、…それに頼ったかもしれませんけど、…ふっきり、ふっきれる、ま、きっかけになったと、いうことで。…すごい良かったとは思ってます。」	「住んでた時は、ま、それが、生活の、ま、場だったんですけれども、こっちに来てから、ま、全部の建物が、なんていうか、象徴的になってしまってて。」 「もう神戸は住むところではなくなってるから、結構客観的にというか、見える部分も出てきたですし。…自分の生活の場というよりは、まあ、遠い、なんていうか、震災のあった街の変わった姿やなっていうふうに。」	「神戸の街が、あまりにももう、復興で、例えばその子が亡くなった空き地のあとにも、もう家が建ってしまったりとかして、そんなとこにずっとおれんと、その子も。」 「神戸におっても、もう知り合いいないですよね，あの辺り。…だからもう、おってもしゃーないんちゃうかっていう風な感じで。帰ったんちゃうかなっていう。」	「亡くなった子は滋賀県の出身なんですね。で、ぼくは神戸でおって、大阪いって、京都で、滋賀に近づいていってる…。」 「亡くなった子の、魂は、…どこにおるんかなってずっと考えてたら、ま、神戸にまだおるんかなとか思ってたんですけど、…こんだけ時間経ったら、滋賀の方に帰ってるかと。…もうぼくも、それやったら、もう神戸抜けてもええんかいなっていう…。」	「…滋賀県の子なんで、滋賀の方を通ったときは、思いますね。大津の駅前に、あの、お墓があるんですよ。だから、大津の駅とおったときとかですね。」 「地縛霊みたいにですね、場所にへばりつくんですね。だから六甲道の、その、亡くなった子の近所やったらやっぱり、あのあたり歩いてたら全部そのことばっかり思い出しますし、三宮やったらまた別の三宮の復興とかでわーっと感動するし。」	「…大学出たときに、ま、みんな消えていったじゃないですか。…それと同じように、この亡くなった子も、消えていったというか。」 「例えば、卒業してから会っていない人っていっぱいいるんですよね、だから、それとおなじ感覚に近いんですね。だからほんまに死んでんのか、亡くなったのかわからへんなっていうことは思いますね。」 「ほんまは生きてるんちゃうかとか、思いますね。」
	考察	これまでは、神戸に住み続けることに対するこだわりがあったが、外からの力、つまり就職によって神戸から離れることになり、震災、友人の死に対する意味づけが変化した。	「神戸」が震災の象徴として見えるようになってきた。このように、「神戸」を距離をとって客観的に見られるようになったことに対しては、肯定的な意味づけがなされた。	友達の中で、自分ひとりだけしか神戸に残っていないので、出られないと感じていたが、神戸を離れてしまったことによって、川野さんも、もうそこにはいなくなったのではないかという、新たな意味づけ（物語生成）が行われた。	自らの移動（引越し）に伴い、川野さんの魂を神戸から移動させることによって、新しい布置関係を想定し、自分のいる場所に近づけるように語られた。	思い出は、特定の場所との関係で思い出される。したがってこれまでは「神戸」が大きな意味を持っていたが、自らが神戸を出たことにより、意味づけが変化し、「滋賀」という場所も、友人を思い出すきっかけとなった。	亡くなった友人とは、大学の仲間であり、大学卒業が一つの区切りとして機能し、友人の占めていた場所（空間）をそれほど意識化する機会が少ないので、もしかしたらどこかで生きているのではないかと思うことがある。

表2　林田さんの1回目と2回目の語りの比較

		変化した点				変化しなかった点	
1回目	語りのまとめ	生前の浜野さんは、人間関係でも助けてくれる等「非常にいい奴」だった。いなくなって、困ったり、惜しいと思った。	年に2回浜野さんの実家に墓参りに行き、彼が生きていたときのことを繰り返し両親に話す。	震災は昔のことと思わないと無理だ。大ショックだったから。忘れていけないことはあるけれど、忘れてがんばらないと、やっていけない。	浜野さんは、試験に合格ラインぎりぎりで通るという「60点の勉強法」が得意だった。自分もこの方法のおかげで、試験等を通り抜けることができた。	関西の人と比べて、関東の人は震災への意識が薄い。	卒業までの「2年間守ってくれたので」、毎晩浜野さんに感謝の祈りをする。
2回目	語りのまとめ	友人の存在を忘れないように残したい。	友人の存在意義と感謝を友人の家族に語る。	震災体験は薄れた。	「60点の勉強法」を「天才の勉強方法」へと一般化。	関東の人との震災体験の相違。	「毎晩の感謝」を欠かさない。
	語られた経験	浜野さんを失ったことが一番きついので、忘れないように、彼が存在していたことを残したい。	年1回程度墓参りに行き、浜野さんの両親に、彼に感謝していることを語る。	震災のことを覚えているのは難しいかもしれない。	全く経験がないコンピュータ・システム開発の仕事を始めたが、「60点の勉強方法」を用いたおかげで、できるようになった。	現在のシステム開発の仕事において、関西にいたという一言で、コストが高いにもかかわらず、震災対策のための分散配置について上司を説得できる。	毎晩就寝前に、浜野さんに感謝する。
	語り口の具体例	「やっぱり友達を失ってしまったことが一番きついから。」 「震災ということは忘れかけてるけど、浜野のことは忘れていない。」 「研究してくれることによって、存在が残るわけ。浜野が残るわけ。」 「浜野が研究材料になることによって、生きていたという証拠に近いから。」	「俺にとって震災は浜野がいなくなったことだから、親御さんに、浜野を覚えているやつがいると言ってやることが大事かな。」 「(親御さんに) あなたの息子さんは、この世の中に何かを残していった。それは私です。息子さんのおかげで就職もできました。」	「その場に生きていないと難しい。震災を覚えているのは難しいかもしれない。」 「震災ということは忘れるかもしれないけど。」	「インターネットもEメールもやったことのないもんが、システム開発するとは、どういうことかわかるか。」 「天才の勉強方法(60点の勉強法) を真似するとすごいね、すごいやつにはかなわないけど。」	「震災によって被害を受けたことはない。」 「関学のときに (神戸に) いました、と言ったら、わかるからさあ、(上司も) 黙るわけね、経験が違うから。」	「浜野に感謝。寝る前に祈る。少なくとも卒業できたのはやつのおかげだな。」
	考察	前回、生前の浜野さんについては、仲の良かった友人の喪失という観点で語られた。だが今回はそれだけはなく、浜野さんが生きていた証拠を残す、という点からも言及されるようになった。	前回も友人の家族に生前のことを繰り返し語っていた。今回はそれに加えて、彼のおかげで今の自分があること、彼の存在意義を強調し、感謝の気持ちを表している。	前回では、震災のショックは大きいが、忘れないと、やって行けないと考えていた。今回は、震災体験を忘れるかもしれないと語られ、震災体験から距離をおくようになった。	前回も林田さんはシステム開発にすでに従事していたが、「60点の勉強法」は学生時代のことにのみ関連づけられいた。ところが今回は、「天才の勉強方法」としてシステム開発にも関連づけられている。	関西人に対しては奈良に住んでいた「非関西人」として語るが、東京にいる非関西人に対しては、神戸の大学にいた「被災者」と語る。聞き手によって自己の位置や物語の内容が変わる。	卒業と就職への感謝を「毎晩の感謝」で表している。

表3　森田さんの1回目と2回目の語りの比較

		変化した点				変化しなかった点		
1回目	語りのまとめ	さまざまなことを、海野さんに結びつけて、よく泣いており、身体症状についての語りもあった。	海野さんはこうしていた、こうするだろう、また、海野さんのためにこうしたいと考えながら行動していた。	「死」がだれにでも突然訪れることを実感した。	何かをしなければならないと思い、ボランティアなどをして、活動的に動いていた。	どこかで見られている感じがする。	海野さんの実家に行き、家族と話したりする。	クラブのときに、海野さんのことを思い出す。
2回目	語りのまとめ	思い出す際の感情が変化した。	何かをやり遂げたあとに思い出す。	これから先の自分を想うようになった。	焦らなくてもいいと考えるようになった。	どこかで海野さんが見ているような感じ。	毎年必ず、海野さんの家族と会う。	不在を感じるのはクラブのとき。
	語られた経験	思い出し方や、その時の感情が変化してきた。	なにか行動したあとで、海野さんのことを思うようになった。	予想のつかない未来に対して、海野さんの死を通して経験したことを活かせる。	この一年間、楽しくやっている。そして、焦らなくてもいいと考えるようになった。	いつもどこかから、海野さんが見てくれているような感じがする。	震災の日には、必ず神戸にこられるので、会うし、墓参りにも行く。	海野さんの不在をもっとも感じるのは、本当はいるはずのクラブにいないとき。
	語り口の具体例	「最初は、現実にはいないということ自体が、信じられないというか。…それから、友達としゃべる内容も、変わってきました。…去年、友達の結婚式があったんだけど、『もしかしたら、今、ここにいはるかもね。』こういう話が今できるし。」「つらかったときのことを思い出して泣くことはないんですけど、その笑顔とかを思い出して、悲しいとかじゃなく、むしょうに涙が出てくることがあるんですよ。ほんとにたまに。これはほんとにすっきりする涙っていうか。」	「彼だったら、こうするだろうということで、そういうことから逃れようとするし、自分が頑張ることで、彼が喜んでくれるだろうと、考える。それが普通になってきてるというか。逆に、何かやってしまったあとで、これはもしかしたら、海野さんがしていたことに近いかなと変わってくる。海野さんの死があって、だから、こういうふうになったんかなっていう。頑張っている私、後で、海野さんを思い返す。いつぐらいからとかっていうのはちょっとわからないね。」	「話をしているときっていうのは、……一生懸命しゃべっていて、あとで何をしゃべったかというのは、あまり頭に残ってないもんですよね。…でも、その会話の流れを書いたのを見ると、あ、確かにこう言ったな、こう言ったなと、思っているうちに、この先の自分が楽しみ、みたいな。」「いつ死ぬかわからないけど、何があっても生きていける、…海野さんのことを思い出すか、もしくはそれまでのプロセスで得たものによって、乗り越えていけるような気はしますね。」	「とても楽しくやっています。妙にいろいろとそんなに焦らなくてもって思いながら、というようになった気がします。それまで、余裕がないガーっという感じで生活してて。」「道があって、石があって、丁寧に一個一個の石を吟味しながら、自分のかごに入れていく人もあれば、ガーっと瞰散らして、とりあえず前に向かって進んでいく人もいるし、私もすごい後者だったんですよ。その辺がちょっと変わってきたかな、この一年くらい。」	「その思い出し方が、あの人のところへ行きたいとかいうのではなく、とにかく頑張らなきゃみたいな、支えになるというか、どっかで見てるような感じがします。」「こういう話をしながらも、その辺に、片隅とかに、いるような気がしたりとかね。…この辺とかも一緒に歩いたりよくしてたし、やっぱりすごいたくさん（思い出の場所が）転がってるよね。」	「震災の日には、必ずこっちに来られるんですよ。で、私も会います。…あとは、仲間内で年に1回お墓参りに行って、彼の実家でご家族の人と飲んでしゃべるという。彼がもう一つ残してくれたもので、もし、こういうことがなければ、友達の彼らとも、そんなに頻繁に会ってないかもしれない。そこで、当時のことをいろいろ思い出して話すこともなかったかもしれない。」	「（彼の不在をもっとも強く感じたのは）震災後、クラブやってたときですね。強烈でした。ほんとにいるはずなんですよ。ほんとにいるはずなのに、いない。という感覚が。いろいろポジティヴには考えていたけれど、やっぱり、いない、という感覚からは逃れられない。いるはず。今でもそう思ってるね。そういう意味では、信じれてないのかなー。」
	考察	思い出にふれる些細なことで涙が出ていたが、思い出す際の感情が変化してきた。前回は、身体症状の話にふれることが多かったが、今回はなかった。	海野さんがしていたことを思い出しながら、同じように行動していた。しかし、いつの頃からか、何かを達成したあとで、海野さんのことを思い出すようになった。	「死」は予想もつかず、いつ誰に訪れるかわからないということを、実感した。これからの自分が「楽しみ」であり、これまでのことを支えに生きていけるという実感をえている。	これまでは、クラブやバイトに没頭したりと、ある意味やみくもに進んできたが、ゆっくり焦らずに進もうと考えるようになった。	いつも、海野さんが、どこかで見ていてくれる、見守っていてくれると感じている。	気持ちの切り替えができたのも、葬式に行って海野さんの両親と話をしたあとであり、家族との関係は、今でもかなり重要なものである。	今までいたところ、また、いるはずのところにいない、という事実に直面する機会に、その不在を感じることが多い。